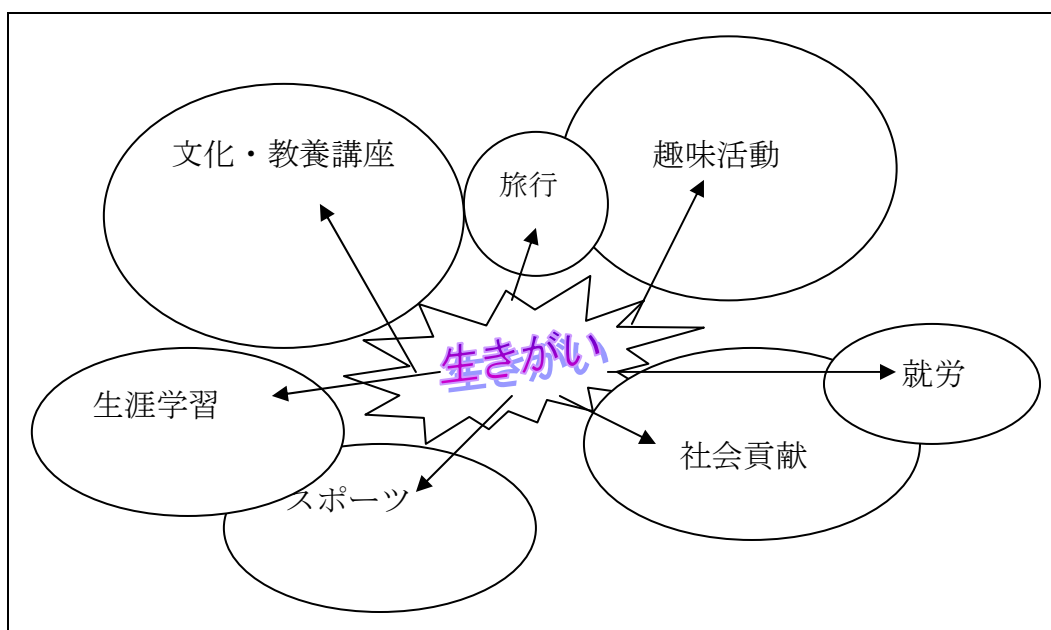


【生きがい】について

① 生きがいの領域

- ・ 生きがいの領域は、文化・スポーツ・趣味・学習など多種多様にわたる。経験豊かな高齢者、障害者とワークシェアリングや企業活動を支援するなど就労関連の事柄もあれば、社会教育・生涯学習のプログラムに参加し、知識や教養を深めたい人、ボランティア活動を通し地域貢献したいという考えの人もいる。



② 生きがいの前提

- ・ 生き生きとした暮らしを送るためには、身体的な健康はもちろんのこと、こころの健康を保持することも重要である。
- ・ いずれにしても、自分で自由に過ごせる時間を持つことを保障していける家庭・経済・社会的条件についても考察しておかなければならない。

③ 生きがいを実現するための要素

【拠点】

- ・ 廃校になった学校を区民のために利用するなどもっと積極的に動いてほしい。
- ・ 地域支援…「寝たきり老人」を「寝かせきり老人」にしない。歩いて行ける場所に情報の場があるといい。

【情報】

- ・「情報」や「ネットワーク作り」というものもひとつのキーワード。
- ・情報…メンバーの発表の中で、こういったサービスがあればという話が出ると、実はすでに区がサービスを行っているという件が多々あった。これから10年後には、区だけでなく、NPOや民間事業者とたくさんのところから提供されることになっていく。知らないことで、サービス利用ができないのは問題である。これらを十分に活用できるよう、情報を一元に管理して必要な方に周知していくシステムの開発が急務。
- ・情報提供という点では、情報誌等インターネット以外の情報提供を考えるべきだという意見も出た。情報周知の資源では「町会」も話題となった。町会の機能の中には行政情報を周知することがあるが、なかなか新しい住民が入っていない、入りにくいという問題もある。

【人材】

- ・ 生きがい活動をともに具現化する仲間をどのように集めるのか。

④ 生きがいの多様性

- ・ ライフサイクルの過程で求められる個々人の役割と生きがいの変化
 (家族内： 子ども → 夫婦 → 親 → 個人)
 (社 会： 学生 → 社会人・主婦 → 地域住民)

例：終末期ケア

末期ガンにおいては、治療は出来ない。その人の体にはもう治療を加えることはできない。しかしながら、「どうして私がガンになってしまったのか。自分の人生はもう終わりだ。」という絶望感の中で自己否定をしながら亡くなるのではなく、「私は死んでいくけれども、自分の人生はこれで良かった。」と自分の人生を肯定しながら、そのときを迎えられるよう、こころを癒す余地は残っている。

ガンそのものは、治癒されなくても自分が今ここに存在していることの意味づけを再認識するという深いレベルの「生きがい」もあるのではないだろうか。

- * 現時点での自分自身の「生きがい」とそれを実現するための条件や公私の役割分担、家族や自分自身の将来に想いを馳せて「生きがい」のあり方を考えてみて下さい。